の動きと関連させなければならないとの考えから、社会の体制・制度の変化や改革の必要性に触れているのです。そのような例として次のエピソードを紹介したいと思います。サナアーン・アルジャマーリーという若い人物が登場しますが、彼の父親がジンに騙された形で悪事を働き処刑されてしまいます。父親がそのような目に遭ったこともあり、サナーンは社会変革を目指す青年に育っていきました。かつてバルヒーの教えを受けながらも秘密の政治結社に入って、一種の革命青年に成長していくわけですが、彼もまたジンに騙され悪事を犯して処刑されてしまいます。こういう状況下、スルタンは多くの人を殺し、権力者として大変な前科者である己の行いを悔いて、王位を退くことになります。作品には、ほかにも統治者の独善や社会の正義、高官が賄賂をもらうなどの不正を糾弾している場面があります。

この訳書について日本経済新聞で岡真理先生に結構な書評を書いていただいたことに大変感謝しております。

インタヴュー（岡真理、福田義昭、勝田茂、藤元優子）

Q．岡真理

Q． ご講演の冒頭で外務省に入省されてカイロへ行かれ、戦後初のアラビア語研修生となられたとうかがいましたが、アラビア語はご自身でご希望なさったのですか？

A． いいえ、英語で試験を受けて入省したものの、当初は赴任地がわかりませんでした。人事課に呼び出されて、「ポルトガル語をやれ」と言われたのですが、ポルトガルとブラジルだけでしか話されていない言語なので気がすすまず、「考えさせてください」と返事いたしました。するとしばらくしてまた呼び出されて、「アラビア語を」ということになったというわけです。アラビア語は地図で見てみると広い地域で話されているからこれはいいと思い引き受けました。アラビア語を勉強したのも偶然であれば、ナギーブ・マフフーズに出会ったのも偶然です。したがってナギーブ・マフフーズの翻訳ができたのもかなり偶然に左右されているように思えます。

Q． エジプト以外でアラブ圏ではどの国に赴任なされたのでしょうか？

A． エジプトに2回赴任したことはすでにお話ししたとおりです。58年1回目のエジプト勤務から帰国してしばらくして、まもなくベイルートに出されるらしいと聞き、最初の赴任期間が5年近かったため、次の赴任も5年になると結婚できなくなると思い、あわてて嫁さん探しをし、結婚して数ヶ月後に妻と一緒にレバノンに赴任し、そこからシリアに転勤しました。次にまたエジプト、その後サウジアラビア、オーストラリア、イラク、カタール、オマーンに歴任しました。アラブ世界では7カ国のどさ回りをしたことになります。マグリブへは全然行っておりません。

Q． エジプトへ初めて赴任された1953年というのは革命の直後ですね。

A． 1952年エジプト革命の年に外務省に入り、その翌年から同国に勤務しました。まさにナセルが英雄だった時代です。

Q． 現地の小学校でアラビア語を勉強されたとうかがいました。
A． 外務省には戦前からそういう伝統があります。カイロ郊外のヌクラーシー小学校に入りました。満員のバスに揺られて小学校へ行き、午前中いっぱい勉強しました。幼い子どもたちとともに勉強するわけですから、子供たちが私のまわりに寄ってきては、服を引っ張ったり、からかったり、また教室で私が何かヘマをすると笑ったりするのでてこずりました。その学校にいた親切な先生が非常に私のことを気にかけてくれまして、家庭教師になってもらいました。それで午後はその先生のお宅にうかがい、アラビア語を教えてもらいました。その後、一年半の研修を終えてから大使館での実務が始まりましたが、勤務は朝８時から午後３時ころまでだったため、勤め出してからも勉強を続けていました。そしていろいろな文学作品を読み始めたという経緯になります。

Q． 多くの作品を読んだ中で、なぜマフフーズに惹かれたのでしょうか。私自身は、マフフーズとそりが合わないのでお聞きしたいと思います。
A． 初めはターハー・フセイン（Ṭāhā Ḥusayn, d.1973）とかタウフィーク・ハキーム（Tawfīq al-Ḥakīm, d.1987）とか有名なエジプト人作家の作品を一通り読みました。ほかにもユースフ・イドリース（Yūsuf Idrīs, d.1991）やユースフ・スィバーイー（Yūsuf al-Sibāʻī, d.1978）も読みましたが、マフフーズがいいなと思ったのは、最初に読んだ短編小説「狂気の独白」が気に入ったからです。平凡な人間が狂気の発作を起こすというストーリーで、不意に人を殴ったり、女の人のおっぱいに触ったりと狂人でなければできないようなことが描かれていて、普通ではないその着眼点に惹かれた訳です。

Q．「狂気の独白」は『現代アラブ文学選』に収録されていますね。私が初めて読んだアラブ小説がまさにそれでした。私の母校東京外国語大学では学園祭で語劇というものを演じます。当時、語劇のシナリオにする作品を探しており、この作品を目にしたのですが、「狂気の独白」は舞台で演じられないなと思いました。
A． 確かに先生が関心を寄せていらっしゃる性的描写がそれほど露骨に表現されていませんね。『シェヘラザードの憂愁』でも人間の男性を誘惑する女のジンが登場しますが、それほど具体的ではありません。ナギーブ・マフフーズの全作品を見まわしても、濃密な描写はほとんどありません。

Q． ユースフ・イドリースの作品では、批評家からもう少し控えられないのかと苦言を呈されるくらい性的モチーフが繰り返され、また地の文にまでアーンミーヤ（アラビア語方言）を使います。この２点においてマフフーズとは対極的であるように思えます。
A． それらに加え、作品の種類も豊富なこともナギーブ・マフフーズの特徴と言えるのではないでしょうか。

Q．『バイナル・カスライン』を翻訳されたときのご苦労についてお聞かせください。
A． カイロ駐在中に翻訳作業に取りかかりましたが、大部分は日本へ帰ってから本格的に行いました。英訳もまだ出ていないころで本当に苦労し、正確でない訳出もあり、またかなり意訳もしていました。

Q． 外務省でお仕事をされながら、どうやって、このような大部な作品の翻訳ができたのでしょうか。
A． 日本人として初めてマフフーズの作品、しかも彼の代表作の翻訳に当ったことは光栄でしたが、実際の作業となると本当に大変でした。しかし発行元が編集委員会を立ち上げ、翻訳候補の作品リストを作り、『バイナル・カスライン』の翻訳に私を指名してきた以上、逃げるわけにはいきません。しかも締め切りがあるので、否応なく任務の遂行に励み、帰宅後机に向かい、深夜に及ぶこともしばしばでした。

Q． これから訳してみたいと思われる作品は？
A． 1988年に出版された最後の長編作品『クシュトムル喫茶店』（*Qushtumur*）ですかね。淡々とした物語ですが、アッバーシーヤの友達との年を取ってからの落ち着いた、静かな会話を楽しむ作品です。最後の作品であるために、刺激的ではないものの、滋味あふれる小説です。

Q． ご講演中で言及なされていた『ハラーフィーシュの詩』はいかがでしょう。お話をうかがって私は大変興味をもったのですが、翻訳のご予定はありますか？
A． この作品と、それに先立つ『わが町内の子供たち』は大作で、高齢の私には無理です。若いこれからの方たちに期待したいと思います。

Q． エジプトだけでなく、イラク、シリアなどでも素晴らしい作家はいると思いますが、塙先生はなぜ一貫してマフフーズに関わっていらっしゃるのですか。
A． 全く興味がないわけではありません。エジプトだけでも、最近読んだもので、非常に刺激的な長編『ヤアコービアン・ビルディング』（‘Alā’ al-Aswānī, *‘Imāra Ya‘qūbīyān*, 2002）には、ナギーブ・マフフーズにない迫力があり、エロティックな場面もあります。余力があれば、訳してみたいところです。

Q．福田義昭

Q． 私は去年エジプトで行われた小説フォーラムに参加いたしました。多くの研究者や作家が集っており、気づけばホテルの自室のドアの前に多くの著書が積まれていました。訳したいとは思いつつもなかなか叶いませんが、塙先生の翻訳に対する情熱には敬服し、また刺激を受けています。マフフーズはアラブ世界の中心的な作家ですが、男性であり、アラブの文化的中心であるエジプト出身で、フスハーで執筆するなど、何を取っても中心的な存在です。これはマイノリティー文学や女性文学が注目される最近の一般的な文学研究の関心からは外れるもので、ある意味で刺激がないとも感じられます。塙先生はナギーブ・マフフーズの作品を訳してきて日本人読者の反応に関してどのように感じておられますか。
A． 一言でいえば「失望」です。私がナギーブ・マフフーズを買いかぶりすぎているのかもしれません。とにかく日本人読者は西洋の作品を好んで読みますが、日本になじみの薄い地域や後進国の作家については熱心でありません。ナギーブ・マフフーズがノーベル文学賞を取った直後には、一部の人々の間で関心が高まりましたが、それもすぐに冷え込んでしまいました。日本で紹介して売

れるかどうかが出版の可能性につながってきます。したがってナギーブ・マフフーズの作品を翻訳して出版することは、かなり難しい状態であると言えます。

Q．『シェヘラザードの憂愁』を翻訳なさるきっかけはどのようなものでしたか？
A．大変おもしろく、また私を刺激する材料がありました。これなら出版社を見つけることができそうだと感じたのも、大きな理由です。実際に、河出書房新社が出版を引き受けてくれました。他方、福田先生のおっしゃったことに関してですが、確かにナギーブ・マフフーズはもはや過去の作家になってしまったかもしれません。リアリズムについても、ヨーロッパでは使い古された手法となりました。最近トルコのオルハン・パムクがノーベル文学賞を取りましたが、彼の作品などは日本で受けています。それに対しナギーブ・マフフーズはまじめで几帳面で羽目を外しません。またファンタスティックであってもどこか哲学的で理屈っぽく、一般読者には難しいと言わざるをえません。

Q．アラビアン・ナイトはアラブ世界では到底文学ともみなされていませんでしたが、ヨーロッパでは評価されてきました。アラブ世界では、ターハー・フセイン作『シェヘラザードの夢』（Ṭāhā Ḥusayn, *Aḥlām Shahrazād*, 1943）や、戯曲ですがタウフィーク・ハキーム作『シェヘラザード』（Tawfīq al-Ḥakīm, *Shahrazād*, 1934）などがあります。シャハリヤールの哲学者的性格などを考えても、これら二つの作品の主人公はどちらかと言うとシェヘラザードの語りの相手であるシャハリヤールで、アラビアン・ナイト（千夜一夜）が終わったところから物語が始まるという構図まで（これは西洋の作品などにもよくありますが）同じです。ナギーブ・マフフーズの『シェヘラザードの憂愁』はまさにタウフィーク・ハキームの『シェヘラザード』の影響を受けているのではないでしょうか。
A．詳しいことはわかりません。もしかしたら影響を受けているのかもしれません。あとがきに書いたことですが、日本のアラビアン・ナイト研究者である西尾哲夫先生は『アラビアンナイト――文明のはざまに生まれた物語』のなかで、「文明の狭間を往還してきたアラビアン・ナイトの千二夜目の物語を紡ぎだしていくことこそが、世界文学としてのアラビアン・ナイトを受け継ぐことになった現代人に課せられた役割ではなかろうか」と書かれています。大きな枠組みのなかで考えると、ナギーブ・マフフーズの『シェヘラザードの憂愁』はまさにこういった期待に応えるものと言えるでしょう。私はそこに大きな意味があるのではないかと考えています。

Q．勝田茂

Q．トルコの現代作家の多くはまず詩を書き発表し、そして短編小説に入ります。というのも、トルコでは最初から長編を発表できる機会がきわめて少ないからですが、ナギーブ・マフフーズは最初の著作で長編を書いています。これはアラブの作家として一般的なのでしょうか、それともナギーブ・マフフーズに特有のことなのでしょうか。
A．ナギーブ・マフフーズは1930年年代ごろから短編小説の習作を始めましたが、それらが雑誌に載るようになって、短編小説集となったのがようやく1948年ごろのことです。長編はそれ以前の1939年に出版されています。基本的には作家の資質が大事ですが、短編であろうが、長編であろうが、とにかく人目に留まって、出版が拡大したのでしょう。他のアラブ小説の作家がどうであ

るかは詳しく存じませんが、詩から入るという例はあまり見ないような気がいたします。

Q． ナギーブ・マフフーズ自身は詩を書いたのでしょうか。
A． 詩集は出しておりません。しかし作品中にしばしば神秘詩が出てきます。

Q． この作家はカイロの旧市街にこだわっていますが、アラブの中世にさかのぼり、回顧するという意図でそうしているのでしょうか。
A． 彼は初期の作品で自分の生まれたカイロ旧市街を舞台に使い、生活感のにじみ出たリアリスティックな描写をしましたが、その時点でアラブ中世にさかのぼる意図はなかったと思います。その後これにはあきたらず、寓意的かつ象徴的な作品を書きだしました。それと同時に、『シェヘラザードの憂愁』や『イブン・ファットーマの旅』によってさらに作品の幅が広がったと言えます。アラブ中世への回帰はそうした作風の広がりのなかの一部をなしているのではないでしょうか。

Q．『シェヘラザードの憂愁』は哲学的かつファンタスティックであり、アラビアン・ナイトと同じようなスタイルで展開しているようですが、今の日本の読者にどのような点がアピールすると思われますか。また実際にどのように受け止められているのでしょうか。
A． 彼が書くからには単なる後日譚ではなく、新しい味付けがなされたことです。その点で、私が強調したいのは、スーフィーの登場とか哲学的な要素で、人生の意味を問うということにつながっていると思います。それはいかにもマフフーズらしい特徴ですが、一般の読者には理屈っぽく、むしろ読書欲を妨げたかも知れません。確かに読みにくさがある上、私の翻訳技術のつたなさについても反省しています。たとえば、この作品には多数の人物が登場しますが、登場人物の名前は、読者にはなじみのないものであり、わかりにくかったのではないでしょうか。今から思うと登場人物を紹介した一覧表を作るべきだったと反省しています。

Q．藤元優子

Q． アラビアン・ナイトはそのタイトルとは裏腹に、もともとはイラン発祥の文学であり、シャハリヤールにせよシェヘラザードにせよ登場人物の名前はイラン人の名前です。そういうわけでイランの人々は自分たちの文学だと思っています。エジプトではアラビアン・ナイトがヨーロッパで評価されたのち再輸入されたという経緯がありますが、イランでは19世紀中頃に当時の皇太子の命令で翻訳がなされたのが始まりです。それまではアラビア語からペルシア語に翻訳されていませんでした。皇太子には、シェヘラザードではありませんが、夜寝るとき専用の語り部がついていて、そのことが翻訳を指示するきっかけになったようです。つまりイラン起源の作品でありながら、イランでも19世紀中頃に再輸入されたというわけです。折しもその時代は近現代文学が盛んになってきたころで、その翻訳作品は新しい文体の形成に寄与したと言われています。私が興味を持っているものに『三千一夜』（Forugh Shahab, *She Hezar-o-Yek Shab*, Tehran, 1989/90）という19世紀後半の王宮に入った女性が主人公の物語があります。作者が主人公の女性というマジックリアリズム的なものなのです。もっとマジックリアリズム的な作品に『何千夜一夜』（Moniru Ravanipur, “Chandin Hezar-o-Yek Shab,” *Sirya, Sirya*, Tehran, 1993/4; モニールー・ラヴァーニープール（藤元優子訳）「何

千夜一夜」『中東イスラム文化の諸相と言語研究』（大阪外国語大学、1999 年）207–218 頁）という物語があります。テヘランの街をさまよう主人公の女性が物語を作り上げて嘘八百を並べて、美容院での代金を無料にしてもらったり、車で送ってもらったりします。彼女は千夜一夜物語の語り手であるシェヘラザード（私の訳ではシャハルザードとしています）と同居しているのですが、彼女は話の種が尽きてしまって翌朝にも殺されそうなので、それを阻止するために同居人の女が夜な夜な町に出て話を集めている、というのです。最終的に女が自分のアパートへ帰ってきて玄関でシェヘラザードに出迎えられますが、その玄関の正面には大きな鏡が置かれています。そして、「早く話を聞かせて」と急かせるシェヘラザードに対して、女は鏡を見つめ、「おお、幸多き王様」と語りかける、というところで物語は終わっています。つまり、語り手である女は、実は王その人でもある、ということになります。これらは語り部としての女性たち、口承でしか伝えて来られなかった女性たちが小説家であったことを証明する作品群とも考えられます。

さて文体についてお伺いしたいのですが、『シェヘラザードの憂愁』の中で使われている文体はアラビアン･ナイトの文体とは違っているのでしょうか。違っている場合、どのように違うのでしょうか。

A． おっしゃるとおりアラビアン・ナイトはイランから入ってきてバグダードで集大成され、エジプトで手が加えられたものですが、題名が千一夜、つまり Alf Layla wa-Layla というアラビア語であることなどからアラブの人々はアラブ文学だと思っており、そのような経緯を知らない人が多いように思います。文体については、私は専門家でないので、確かなことは言えません。特に、アラビアン・ナイトは時代的変遷を経て完成したものであり、また種々の版があります。ただ手元にあるものを見ますと、基本的に文語体で、現在でも通用するものです。

Q． 見せていただいた原作の表紙に興味を惹かれました。ある意味、稚拙というか、内容もあっていないような気がします。一方英訳本の表紙は、天使が飛んでいて、苦しめられている人間がいて、いかにもアラビアン・ナイトという感じです。

A． これはエジプト人の挿絵画家ガマール･クトゥブ（Jamāl Quṭb）が描いた絵です。彼の絵にはヨーロッパ的な側面があります。ちなみに邦訳の表紙の参考にと原作のこの表紙を出版社に見せましたが、一目見て「こんなヨーロッパ的な表紙絵はアラビアン･ナイトに似つかわしくないからだめだ」と言われてしまいました。

Q． わたしもさまざまなところで妥協せざるを得ないことがありますので、よくわかります。専門家としては書いてあるとおりに訳したいところも受け入れられなかったり、また注が多すぎてもいけなかったりしますね。今日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

A． わたしは研究者ではなく、一介のアラビア語屋ですが、今回は現代中東文学研究会に参加する機会を与えていただき、身に余る厚遇を受けましたことに深く感謝いたしております。ありがとうございました。